近世陸奥中村藩における浄土真宗信徒移民の導入 ——木幡彦兵衛の覚書にみるその実態——

The immigration of Jodo Shinshu-sect Buddhists into the Mutsu-Nakamura domain during the Tokugawa period : the actual situation as seen from the memoranda of Kowata Hikobei

岩本 由輝*

Yoshiteru IWAMOTO

Population decline, caused by increasing social mobility, and the related immigration of Hokuriku Jodo Shinshu-sect Buddhists were precipitated by the need to redevelop agriculture, reduce poverty and restore the Mutsu-Nakamura domain's troubled finances in the latter part of the Tokugawa period. In the following paper, the memoranda of Kowata Hikobei (a rural administrator with the social position of samurai, who, along with his father, worked to organize the immigration) are used to explore the intelligence network by which 301 individuals from 57 households of the Jodo Shinshu religious community immigrated to the Mutsu-Nakamura domain during the period from 1815 to 1832.

The arrival of some 3,000 or so immigrants in the Mutsu-Nakamura domain from 1813 to 1871 was seen as a great "success", particularly in terms of re-invigorating the domain's finances. It should be noted, however, that this internal migration neither assisted the contemporary strengthening of the shogunate nor hastened its collapse. Rather, having a strong intelligence network the Jodo Shinshu religious community removed itself from the framework of the shogunate, and in the process they served their own organization by, in effect, making the whole Japanese archipelago "borderless".

1. はじめに

東北太平洋岸南部に位置する陸奥中村藩相馬氏6万石の領内人口は、1698(元禄11)年の89,120人を頂点に減少に転じ、1761(宝暦11)年には61,014人となる。その後、1783(天明3)年には53,276人であったのが、1786(天明6)年には36,785人と落ちこむ(今野、1940=1979、873頁)。この減少の主因は、近世中期に始まった恒常的な欠落による社会的移動にあったことを見逃すことはできない。1783(天明3)年から1786(天明6)年にかけての18,000人ほどの減少も、とかく飢饉による死亡とみなされがちであるが、そのような形にして、それまでに累積された欠落が処理されたことに気づく必要がある。人間は座して死を待つほど悠長な動物ではない。この時期になると、日本列島全体で就業機会を求めての人口の流動化が進んでいたのである。しかし、藩にとっては、人口が減れば手余り地が生じて、貢租収入が

減少するので財政は窮迫する。

そこで、中村藩は、天明飢饉のあと、間引き禁止などで人口増加を策するが、それでは生産力人口の増加という実効をただちにあげることはできなかった。このため中村藩では他領からの移民導入によって生産力人口の増加をはかることになるが、それが実行に移されるのは1813(文化10)年からである。

2. 北陸浄土真宗僧侶の中村藩への到来

中村藩における浄土真宗信徒移民の導入にとって1810、11(文化7、8)年に複数の北陸浄土真宗僧侶が相次いで到来したことは重要な意味を有する(岩崎、1963=1976=1984、468-470頁)。

まず、1810(文化7)年には越中(現富山県)から来たと称する浄土真宗大谷派(東本願寺派)の僧闡教が陸奥宇多郡馬場野村(現福島県相馬市)に東福庵を開き、また、越中砺波郡下麻生村(現富山県高岡市)の浄土真宗本願寺派(西本願寺派)最円寺の次男廓然が陸奥行方郡南柚木村(現福島県南相馬市鹿島区)にやって来る。そして、1811(文化8)年

* 東北学院大学名誉教授

には越後蒲原郡堤新村（現新潟県阿賀野市）の大谷派光円寺の次男恵敬が行方郡南新田村（現南相馬市原町区）に来て草庵を結び、さらに東福庵の闍教のところに砺波郡二日町村（現南砺市）の大谷派普願寺の三男林能（のち発教）が到来する。なお、闍教については長らく越中から来た大谷派の僧とだけいわれてきたが、みずからも砺波郡清水村（現小矢部市）から1817（文化14）年に移住して来て行方郡高村（現南相馬市原町区）に取り立てられた浄土真宗信徒移民十右衛門の末裔である杉内清によって、闍教が加賀石川郡小島村（現石川県白山市、平成の大合併以前は石川郡吉野谷村）で東福庵を営んでいたという事実が突き留められ（杉内編、1975、21頁）、岩崎もこのことを確認している（岩崎、1998、61-63頁）。ただし、池端大二是、小島村というのは通称で、木滑新村というのが正式のものという（池端、1980、35-38頁）。木滑新村については、「時期は不明だが小島村とも称した」とし、そこには「真宗木滑道場があった」ともいわれている（角川書店、1981、323頁）。要するに、闍教が小島村で営んでいたという東福庵は、そうした道場の1つであり、中村藩に来てからも、それを踏襲して寓居を東福庵と称したのであろうが、闍教の履歴が何となく曖昧にされてきたのは、あとでみるように闍教が中村藩の移民導入に関わったことで、何らかの不穏な死を遂げたらしいことがからんでいるように思料する。

いずれにせよ、この時期、大谷派と本願寺派の僧4人が加賀・越中および越後から中村藩に到来した背景には、単に、それまで浄土真宗の教勢が希薄であった中村藩内での教線拡大を目指したという以上に、先行していた北関東諸藩、とりわけ常陸笠間藩牧野氏8万石領内への移民が、加賀金沢藩前田氏100万石との間に紛議を起し、その導入の中心となっていた常陸茨城郡稲田村（現茨城県笠間市）の大谷派西念寺（稲田禅坊とも呼ばれ、親鸞および二十四輩遺蹟寺院の筆頭、現単立）の僧良水が1808（文化5）年に自刃したこと（本庄、1932=1941=1972、497頁）で、当面、そこでの移民の推進が不可能になったことによって生じた北陸浄土真宗寺院の差し迫った事情があったとみなすことができる。それら寺院の信徒のなかには、人口圧から来る多くの移民希望者があり、すでに身辺整理を終えている者もあったため、さしあたり笠間藩にかわる移民先を求める必要があり、著しい人口減少のもと、その増加策に腐心していた中村藩に白羽の矢が立てられたものといえよう。

そのことは、闍教および林能改め発教が現相馬市

中野の大谷派正西寺、廓然が現南相馬市鹿島区の本願寺派勝縁寺、恵敬が現南相馬市原町区の本願寺派常福寺と現福島県双葉郡浪江町の本願寺派常福寺という中村藩の新百姓取立政策に貢献したとされる寺院の開祖あるいは中興の祖とされているところをみれば明らかであろう。そのさい大谷派寺院の出身である恵敬が本願寺派常福寺の中興の祖となるという交錯もみられるが、それは別に教義上の問題として生じたものではなさそうであり、また、恵敬が隠居したとき、その後継となったのは、越中砺波郡二日町村（現南砺市）の大谷派普願寺の二男恵順、すなわち大谷派正西寺の開祖林能改め発教の兄であって、ここでも恵順の本願寺派への転派がみられるのである（岩崎、1963=1976=1984、470頁）。

巷間、浄土真宗と他宗との融和はしばしば難しいといわれるが、大谷派と本願寺派との関係は、中村藩内でみる限り、僧侶にしる信徒にしる実に融通無碍のところがある。そこには中村藩の寺院対策もかわってようが、幕府が新しい寺院の創建を厳しく制限していたので、廃寺の寺跡を興すという形をとることが多かったことも関係しているのではなかろうか。

3. 木幡彦兵衛の「追年入百姓覚」

中村藩における移民導入にさいして、現地でその世話をした人物に行方郡益田村（現南相馬市原町区）の在郷給人木幡彦兵衛がいる。彦兵衛が正式に新百姓取立世話人となるのは、1829（文政12）年7月に藩が御頼立百姓取立を打ち出したとき、「新御趣意開発引受人」に任命されてからである（河村雄助『従天明天保迄新百姓取建方万控』（以下『万控』と略記）一 福島県立図書館所蔵文書）が、実際には父の木幡彦右衛門以来、藩の移民導入の初期、具体的には1815（文化12）年12月、まだ藩が他領農民の導入を公然とは実施するにいたっていない時期にさかのぼって、実質、世話人としての役割を果たしていた。そして、彦兵衛は、後年、父彦右衛門以来、取り扱ってきた移民、すなわち入百姓について人別に「追年入百姓覚」（南相馬市博物館所蔵文書）としてまとめているが、この文書から作製されたのが、附表「新百姓取立世話人木幡彦兵衛扱いの入百姓一覧」（以下「一覧」と略記）である（25頁）。

「一覧」によれば、彦右衛門・彦兵衛父子は、1815（文化12）年12月から1832（天保3）年6月までの17年間に、57戸・301人の入百姓のうち、みず

図-1 木幡彦兵衛の世話で導入された入百姓の取立地

からの居村である行方郡益田村に14戸、同郡鶴谷村に10戸、下太田村に9戸、高村に3戸、大甕村に2戸、米々沢村に2戸、江井村に2戸、上太田村に2戸、長野村に1戸、矢川原村に1戸、中太田村に1戸、雫村に1戸、小浜村に1戸、下江井村に1戸（いずれも現南相馬市原町区）および宇多郡赤木村（現相馬市）に1戸のあわせて51戸の世話人となっていることがわかる。このうち赤木村の1戸を除く14カ村の50戸は、図-1にみるごとく、いずれも益田村に近接して父子の眼の届きやすい範囲に導入され、赤木村の1戸も1824（文政7）年10月には近接する高

村に移っている。なお、57戸中、6戸はどこに取り立てられたかは不明であるが、うち4戸は欠落とあるのに対し、2戸は他の世話人のもとで取り立てられている可能性がある。そして、欠落とある4戸のうち、2戸は取立地決定前に欠落したようであるが、残り2戸の欠落は1832（天保3）年2月と1833（天保4）年11月とあるから、前者の来着が1826（文政9）年1月23日、後者の来着が1819（文政2）年2月29日であることをみれば、他の世話人のもとで取り立てられ、それぞれそこで生活していたものであり、天保飢饉に際会して欠落したのを彦兵衛が聞き、来着時にかかわりのあった者であることから記録に留めたのであろう。さらに、父子のもとで益田村に取り立てられた者でも、1817（文化14）年10月22日に来着して1819（文政2）年11月に欠落した者と、1817（文化14）年10月24日に来着して1826（文政9）年頃に欠落した者がおり、また、1832（天保3）年4月に来着して上太田村に取り立てられた者など、その1か月後の5月4日に早くも欠落している。

こうした欠落は個別的にはさまざまな事情があったことであるにせよ、中村藩の新百姓取立がそもそも他領の欠落農民に依存しているわけで、そうした者がまた欠落しただけともいえようが、天保飢饉時の欠落が目につくのはやはり考えさせられるものがある。しかし、いずれにせよ、欠落一般は日本列島全体における人口流動化の進行を感じさせるものであり、中村藩における浄土真宗信徒移民は藩内の戸数・人口の増加という点でしばしば“成功”であったようにいわれるが、それは決して幕藩体制を強化するには役立たず、中村藩での移民導入の“成功”そのものが1868（慶応4＝明治元年）における明治維新という形で幕藩体制の崩壊を招き寄せる作用の一つであったことは否定すべくもない。とにかく、その間において欠落という形で幕藩体制の設定した境界を事実において無化せしめた浄土真宗教団の果たした役割を視野に入れないわけにはいかない。なお、彦右衛門・彦兵衛父子は、1817（文化14）年10月23日に来着した1戸を1819（文政2）年3月に追放しているが、おそらく世話人の立場からみての不行跡があつてのことではなかろうか。

このほか、1818（文政元）年に行方郡鶴谷村から同郡米々沢村に移動した1戸と、1829（文政12）年2月に陸奥信夫郡上飯坂村（現福島県福島市）から来着して行方郡小浜村に取り立てられた1戸があるが、これらは父子扱いの51戸に含まれていても、浄土真宗信徒移民ではない。前者は行方郡高村の真言宗真

広寺の檀家で、寺籍をそのままにして米々沢村に取り立てられた藩内移動であり、後者は、当時、陸奥白河藩の飛地領であった上飯坂村の真言宗八幡寺の檀家であったもので、寺籍を小浜村の真言宗無動寺に移している。

ところで、彦兵衛の「追年入百姓覚」は、父子の扱った入百姓に関する記録であって、中村藩が導入した3,000戸にのぼるとみられる移民のごく一部を示すものにすぎないが、入百姓の出身地、そこでの菩提寺、中村藩での菩提寺、来着時の家族構成、中村藩での取立地を知ることができる。来着後の出生についての記載も一部にみられるが、彦兵衛は途中からそれを記録することをあきらめたようで、すべての家族における、それを網羅しているわけではない。また、来着後の入百姓の家族における、その後の死亡・婚姻・養子縁組などによる異動も記録されていない。おそらく彦兵衛が来着後の出生の記録をあきらめたのは、死亡などの人口異動が把握できなければ、出生だけを調べても意味がないと感じたからであろう。

彦兵衛は「追年入百姓覚」を作るにあたって、以下の証文2つを掲げている。

寺出証文の事

喜三郎ト申者家内何人

拙寺旦那那紛無御座候。此度貴御地ニ罷越、御姓ニ被成度願出候而、任願指遣可申候。以来此方ニ構無之候。

付、貴寺旦那中御入可被成、為後日寺送り如件。

月 日

何村 何寺

何村何寺江

村出し証文之事

当村誰ニ男誰与申者、高所紛無之ニ付、家内何人、貴御地江罷越、御百姓相建度願出候ニ付、任貴意此方人別相外し指遣候間、貴御地人別江御引加へ可被成、以来此方ニ指構無之候。

依而為後日村出し証文如件。

月 日

名主

組頭

親類

相馬領何村

肝入誰殿

しかし、それにしては、入百姓の出身地が「砺波

郡秋元村」を「戸波郡悪本村」、「射水郡開発村」を「伊水郡貝保津村」と、また、そこでの菩提寺が「妙専寺」を「明泉寺」、「楽入寺」を「楽明寺」と書くといった当て字の類が多く、とても入百姓が出身地から持参したものによったと考えることはできない。したがって、これらの入百姓の多くがそもそも欠落によるものであることを彦兵衛が書類的に糊塗すべく、来着後の入百姓からの聞き取りによって作製したとみなすべきであると考え。出身地や菩提寺が虚偽のものではなくとも、当て字の類が多いことから「一覧」の出身地や菩提寺は『角川日本地名大辞典』第16巻・富山県（角川書店、1984年10月）や『富山県の地名』日本歴史地名大系16（平凡社、1994年7月）などを使って判じ物のような形で割り出したものである。なお、彦兵衛が用いたとしているこれらの証文は、現在のところ1枚も実物は確認されていない。

つぎに、図-2「木幡彦兵衛扱いの入百姓の出身地（平成の大合併以前の市町村別）」は、さきの「一覧」にあげた入百姓の出身地と菩提寺を平成の大合併以前の市町村別に整理したもので、57戸のうち、47戸は富山県内にあり、アミカケ部分からわかるように、東砺波郡福野町（現南砺市）の19戸を筆頭に、砺波市の6戸、西砺波郡福光町（現南砺市）の6戸、高岡市の4戸、東砺波郡井波町（現南砺市）の3戸、同郡城端町（現南砺市）の3戸、婦負郡婦中町（現富山市）の2戸、同郡八尾町（現富山市）の1戸、小矢郡市の1戸、東砺波郡庄川町（現砺波市）の1戸、黒部市の1戸の順である。これら47戸のうち、現富山市となっている婦負郡下吉川村（婦中町）の2戸と同郡下高膳寺村（八尾町）の1戸が加賀金沢藩の支藩である越中富山藩10万石の所領からの移民であるが、それ以外の45戸は越中砺波郡・射水郡・新川郡といっても金沢藩領からの導入である。また、新潟県内からは越後新発田藩溝口氏4万8,000石の所領である越後蒲原郡戸頭村（現新潟市、平成の大合併以前の白根市）から3戸、越後村松藩3万石の所領である蒲原郡中村（現見附市）から1戸、越後長岡藩牧野氏7万4,000石の所領である蒲原郡松野尾村（現新潟市、平成の大合併以前は西蒲原郡巻町）から1戸、計5戸の移民が導入されている。そして、石川県内からの2戸はいずれも金沢藩領の加賀河北郡木越村（現金沢市）からの移民である。さらに出身地・菩提寺ともに不明が1戸あるが、中村藩では大谷派長願寺を菩提寺としているから浄土真宗信徒移民とみて差し支えあるまい。

図一 木幡彦兵衛扱いの入百姓の出身地（平成の大合併以前の市町村別）

注1：数字は戸数、カッコ内は送出寺院の数（大：浄土真宗大谷派／本：浄土真宗本願寺派／真言：真言宗）
 注2：平成の大合併によって、この図における富山県西砺波郡福岡町は高岡市に併合され、新湊市と射水郡下村・大島町・小杉町・大門町は合併して射水市となり、東砺波郡庄川町は砺波市に併合され、東砺波郡福野町・井波町・井口村・城端町・利賀村・平村・上平村と西砺波郡福光町は合併して南砺市となり、婦負郡婦中町・八尾町・山田村と上新川郡大沢野村・大山町は富山市に併合され、下新川郡宇奈月町は黒部市に併合されている。また、新潟県白根市・西蒲原郡巻町は新潟市に併合され、福島県原町市は、合併の結果、南相馬市原町区となっている。

いずれにせよ、平成の大合併以前の東砺波郡福野町（現南砺市）を中心にまとまっているが、福野町は、中村藩での移民たちの受け入れ寺院となっている大谷派東福寺、のちの大谷派長願寺（現大谷派正西寺）の開祖である林能改め発教と、その兄で本願寺派常福寺の継承者となる恵順の、また、高岡市は本願寺派勝縁寺の開祖となる廓然の出身地であることを改めて確認しておきたい。なお、現福島県内での移民は2戸あるが、1戸は藩内移動で、もう1戸は現福島市からの移動で、ともに真言宗の檀家であることはすでにみた。

4. 僧発教（林能）の移民導入

中村藩の移民導入は、1813（文化10）年に元家老久米泰翁の依頼を受けた東福寺の林能（のち発教）

によって始められたとあるが、当時、林能は13歳の少年であったというから、久米の依頼を受けたのは闍教で、林能は最初のうちは、その使僧として動いたとみるべきであろう。とにかく、この年、林能は金沢藩内に赴いて4軒の入百姓を連れて戻り、久米が用意していた行方郡山下村（現南相馬市鹿島区）、同郡押釜村・信田沢村（ともに現南相馬市原町区）、宇多郡柏崎村（現相馬市）にそれぞれ入植させている（岩崎、1963=1976=1984、467頁）。そして、彦兵衛の「追年入百姓覚」によれば、「一覧」の1815（文化12）年12月から1817（文化14）年10月2日までに来着した15戸と同年10月24日に来着した1戸は、いずれも馬場野村東福寺（庵）を宛先にした寺出証文によるとあるから、林能が導入にかかわっていることは明らかであるが、馬場野村東福庵は1810（文化7）年に到来した闍教が結んでいたものであり、

それが東福寺として寺出証文の宛先とされていることに注目したい。そこには闍教の到来が中村藩への移民を積極的に進める意図を有していたことを窺わせるものがある。闍教は1818（文化15＝文政元）年に東福庵を城下中村向町（現相馬市中野、向町は通称）に移して円満寺と称したとある（同上、470頁）。このあと、闍教は林能に後事を委ねて中村藩を去ったといわれるが、その後の経緯はまったくつかめない。しかし、私は現相馬市中野の発教を開祖とする大谷派正西寺の過去帳の闍教の欄が没年月日を1820（文政3）年8月15日とする以外、詞書の部分が完全に墨で抹消されているのを確認している（岩本、1984、421頁所載写真）。当時、その死の具体的なことについて知られたくないことがあってのことであろうが、闍教が加賀・越中などの金沢藩領内の農民を欠落させて中村藩への移民として導入したこととの関連で生じた不穏な死であった可能性が高い。中村藩領内には移民導入にかかわった飴屋義介という人物が金沢藩において刑死させられたという伝承があり、林能についても手配のための人相書が配られたという話もある（岩崎、1963=1976=1984、478頁）。

いずれにせよ、闍教が去ったあと、林能は発教と改め、寺名も円満寺から長願寺として移民導入を継続するが、彦兵衛の「追年入百姓覚」によれば、1817（文化14）年12月17日来着の1戸の寺出証文から宛先が大谷派長願寺となっていてみると、改称がこの直前において行なわれ、それがすぐに金沢藩領内をはじめとする北陸浄土真宗寺院にも伝わっていることが窺える。そして、1820（文政3）年2月29日来着の1戸、同年4月15日来着の1戸、1821（文政4）年2月29日来着の1戸、同年5月来着の1戸の宛先も長願寺であり、発教のかかわりを示す。

しかし、中村藩の場合、あとにみるように、1823（文政6）年に策定され、1824（文政7）年から実施された金主立百姓取立以前には、立て前としては「他領ヨリ移住」した入百姓による新百姓取立は行っていないことになっているから（今野、1941=1979、148頁）、その年次までの「一覧」にみる入百姓は、要するに非合法移民として導入された者であるが、しかもそれらは彦右衛門・彦兵衛父子が扱ったものだけであり、林能（発教）が他の複数の世話人に扱って貰った移民がいることも知っておかなければならない。

ところで、中村藩が1824（文政7）年から「他領ヨリ移住」した者を新百姓として公然と取り立てるようになったのは、1820（文政3）年3月2日に金

沢藩が出した「御郡方の者の公事出入及び他国旅行等の儀に就きて令す」において、従来、欠落者は引き戻し、厳罰に処していたのを、

（前略）

無拋下々親戚之者共、外稼も致兼、乞食同様ニ相成、御領國中致徘徊、其末々より直に他國に罷越、煩故障等有之、先々より夫々申来、彼是御上之御難題に相成候族有之、不届之至りに候。是等も畢竟村役人等勢力共も不行届、且は親類の見継方も深切ならず故、居住所を立出、中に者無拋右様之仕業に致り申者茂可有之哉。左候ては歎々敷儀に相聞え候。尤先々において故障等有之候得ば、第一御外辺何御難題之儀、暨所方一統面倒之節ニ候条、親類は勿論、常々組合申談、不頼之者共出来不致様有之度之事ニ候（『加賀藩史料』1939、912-3頁）。

という形に改め、欠落者を、いわば黙認する方針に転じたことが関係しているのである。金沢藩としては、欠落者が出るのは、村役人や親類の不行届、不親切のしからしむるところであるから、そのような者が出ないよう親類や組合で常々面倒をみるようにという以外に手の打ちようがなかったことがわかる。このことは、人口の流動化による幕藩体制の崩壊が日本列島全体に進行していることを示すものにほかならない。

さらに、1825（文政8）年12月27日来着の1戸、1826（文政9）年1月23日来着の2戸、同年12月30日来着の1戸、1827（文政10）年2月26日来着の1戸、1828（文政11）年2月来着の1戸、同年12月来着の1戸、1829（文政12）年3月来着の1戸、同年来着の1戸、1831（天保2）年10月来着の1戸が長願寺を宛先にした寺出証文を持って来ており、やはり発教のかかわりが明らかである。

この間、東福寺（庵）、円満寺、長願寺はいずれも発教を住持とする同じ寺であるが、正式の寺院ではなかった。幕府の宗教政策によって新寺の創建は困難であったことから、あくまで「会談通所と号し、本願寺知事僧巡業の旅館と為せり」といわれるものであり、正式の寺院になったのは1836（天保7）年8月晦日に、中村藩内の標葉郡大堀村（現福島県双葉郡浪江町）の大谷派正西寺善成の嗣を、移民導入に功績のあった発教が継ぐという形式をとって大谷派長願寺を大谷派正西寺と改めたときである（『相馬市史』1969、152頁）。

5. 中村光善寺の移民導入

中村藩への入百姓が持参した寺出証文のなかには宛先を城下中村の本願寺派光善寺にしたものもあった。「一覧」に見るように、1817(文化14)年10月6日から23日にかけて来着した3戸がそれである。彦右衛門・彦兵衛扱いの入百姓で、光善寺を宛先とする寺出証文を持ってきたのはこの3戸だけであるが、1816(文化13)年11月7日に東福寺を宛先とする寺出証文を持って来着した1戸のちに菩提寺を光善寺に変更している。しかし、光善寺も移民取り立ての寺として重要な役割を果たすことになるので、その来歴を記しておく。

本願寺派光善寺は1652(慶安5=承応元)年に西本願寺の公許を得て、宇多郡柏崎村(現相馬市)から城下中村に移った藩内で最も古い浄土真宗寺院であり、その境内に末寺として常福寺、光慶寺、光明寺の三寺を有していたが、寺勢必ずしもふるわず、三末寺は廃寺同然の状態にあったといわれる(岩崎、1963=1976=1984、470頁)。しかし、浄土真宗信徒移民が入ると、それら移民の菩提寺として寺勢を回復し、末寺を再興させるにいたる。

6. 僧恵敬の移民導入

「一覧」によれば、1818(文政元)年10月来着の1戸を手始めに、1819(文政2)年2月29日来着の1戸、同年3月2日来着の1戸、同年閏4月18日来着の1戸、1820(文政3)年2月24日来着の1戸、1826(文政9)年1月23日来着の2戸が持参した寺出証文の宛先は行方郡南新田村(現南相馬市原町区)の本願寺派常福寺となっている。そして、この常福寺こそ、さきにみた本願寺派光善寺の廃寺同然の末寺が移民の菩提寺として再興されたものであり、中興の祖としてそれを推進したのが、1811(文化8)年に中村藩に到来した恵敬である。すでにみたごとく、恵敬は大谷派寺院の出身であったが、本願寺派常福寺を再興したのである。常福寺の再興が西本願寺から認められたのは1818(文化15=文政元)年のことである(『相馬市史』1969、747頁)が、同年中に寺出証文の宛先にされたのであり、大谷派であれ、本願寺派であれ、さきの大谷派東福寺の長願寺への改称の場合とともに、浄土真宗教団において、こうした情報の伝播がいかに速かったかを窺わせ、移民事業に教団が組織としてかかわっていることを示している。本願

寺派常福寺が堂宇を建てたのは1823(文政6)年1月とされるが、1826(文政9)年11月には発教の兄である恵順が恵敬の養子となり、大谷派から本願寺派の僧に転じている(岩崎、1963=1976=1984、470頁)。このあたりが、他宗との融合にかたくなな浄土真宗であるにもかかわらず、浄土真宗内の転派が僧侶を含めて融通無碍になされているように私にはみえ、興味を引くゆえんである。そして、恵順を養子にした恵敬は、その翌年である1827(文政10)年に藩内の標葉郡権現堂村(現福島県双葉郡浪江町)に隠居して庵を結ぶが、これが1853(嘉永6)年に本願寺派浪江常福寺となっている(同上、471頁)。

7. 移民の送出寺院と受入寺院

ここでは中村藩への移民を送出した寺院とそれを受け入れた中村藩内の寺院についてみていこう。それはもとより彦右衛門・彦兵衛父子の扱った移民に限られるものであるが、それでもこの移民に北陸浄土真宗教団がきわめて組織的にかかわっている状況を一層明白に知ることができるであろう。

最も送出数の多かったのは越中砺波郡福野村(現富山県南砺市)の本願寺派西方寺の5戸であり、同郡院林村(現南砺市)の檀家を1817(文化14)年に1戸、1819(文政2)年に2戸、1820(文政3)年に2戸を送出するが、寺出証文をみると、3戸に本願寺派常福寺宛てを、1戸に大谷派東福寺宛てを、もう1戸に大谷派長願寺宛てを持たせている。東福寺と長願寺は発教開祖の寺であり、常福寺は発教の兄恵順が養子に行くことになる寺である。

また、4戸送出の寺院として砺波郡城端村(現南砺市)の大谷派善徳寺は、1822年(文政5)年に同郡岩木村の檀家1戸を、1827(文政10)年に同郡鳥後越砂子谷村(現南砺市)の檀家1戸を、1828(文政11)年に同郡在房村(現南砺市)の檀家1戸を、1829(文政12)年に同村の檀家1戸を送出するが、寺出証文の宛先はいずれも大谷派長願寺である。

つぎに3戸送出の寺院であるが、砺波郡井波村(現南砺市)の大谷派端泉寺は、1816(文化13)年に同郡山見村(現南砺市)の檀家2戸に大谷派東福寺宛ての、1817(文化14)年に同郡井波村の檀家1戸に本願寺派光善寺宛ての寺出証文を持たせている。そして、越後蒲原郡月潟村(現新潟市)の大谷派満徳寺は、1816(文化13)年に同郡戸頭村(現新潟市)の檀家2戸に大谷派東福寺宛て、1826(文政9)年に同村の檀家1戸に大谷派長願寺宛ての寺出証文を

附表「新百姓取立世話人木幡彦兵衛扱いの入百姓一覧」(1815～1832)

[illegible]

注：菩提寺について、「本」は浄土真宗本願寺派、「大」は浄土真宗大谷派、真言は真言宗

出典：『追年入百性覚』（南相馬市博物館所蔵）より作成

出典：『追年入百性覚』

持たせている。また、越中砺波郡在房村（現南砺市）の本願寺派専徳寺は、1817（文化14）年に同郡是安村（現南砺市）の檀家1戸は東福寺宛、1821（文政4）年には同郡八塚村（現南砺市）の檀家2戸を送出するが、その宛先の寺は彦兵衛の記録では空白とされている。さらに、砺波郡院林村（現南砺市）の大谷派常願寺は、1817（文化14）年に同郡清水村（現小矢部市）の檀家1戸と、1831（天保2）年に同郡八幡村（現南砺市）の檀家1戸を送出するが、寺出証文の宛先はすべて大谷派長願寺である。

ついで檀家2戸送出の8寺についてみる。まず、砺波郡秋元村（現砺波市）の本願寺派光福寺は1815（文化12）年に同村の檀家1戸を大谷派東福寺あてに、1820（文政3）年に同郡頼成村の檀家1戸を大谷派長願寺あてに送出する。つぎに越中婦負郡郡上吉川村（現富山市）の本願寺派楽入寺は1816（文化13）年に同村の檀家2戸を大谷派東福寺に送出する。また、越中砺波郡二日町村（現南砺市）の大谷派普願寺は、発教とその兄恵順の生まれた寺であるが、1816（文化13）年に同郡下吉江村（現南砺市）の檀家2戸を大谷派東福寺、すなわち発教を開祖とする寺に送出する。以下、同郡野尻村（現南砺市）の本願寺派等覚寺は1816（文化13）年に同郡苗島村の檀家1戸を大谷派東福寺に、1821（文政4）年に同村の檀家1戸を大谷派長願寺に送出する。砺波郡杉本新村（現砺波市）の本願寺派真光寺は1820（文政3）年に同郡安川村（現砺波市）の檀家2戸を送出するが、その宛先の寺は彦兵衛の記録では空白になっている。砺波郡宮丸村（現砺波市）の大谷派西方寺は1826（文政9）年に同郡安川村の檀家1戸を、1829（文政12）年に同郡庄金剛寺村の檀家1戸をそれぞれ大谷派長願寺に送出する。砺波郡田尻村（現南砺市）の本願寺派賢徳寺は1826（文政9）年に同村の檀家2戸を本願寺派常福寺に送出している。さらに加賀河北郡木越村（現石川県金沢市）の本願寺派福千寺は、1832（天保3）年に同村の檀家2戸を送出するが、その宛先の寺は彦兵衛の記録では空白となっている。

このほか檀家1戸だけを送出したのは以下の18寺である。1815（文化12）年に越中射水郡開発村（現高岡市）の大谷派妙専寺は同村の檀家1戸を大谷派東福寺に、1816（文化13）年に砺波郡梅原村（現南砺市）の大谷派以速寺は同郡蓑谷村（現南砺市）の檀家1戸を大谷派東福寺に、1816（文化13）年に越後蒲原郡葛巻村（現新潟県見附市）の大谷派浄蓮寺は同郡中村（現見附市）の檀家1戸を大谷派東福寺に、1816（文化13）年に砺波郡川除新村（現南砺市）

の大谷派照恵寺は同郡前田村（現南砺市）の檀家1戸を大谷派東福寺に、1817（文化14）年に砺波郡金戸村（現南砺市）の大谷派専徳寺は同郡是安村（現南砺市）の檀家1戸を大谷派東福寺に送出している。また、1817（文化14）年に越中婦負郡下高膳寺村（現富山市）の本願寺派勝福寺は同村の檀家1戸を本願寺派光善寺に、1817（文化14）年に越後蒲原郡松野尾村（現新潟市）の大谷派善正寺は同村の檀家1戸を本願寺派光善寺に送出している。そして、1818（文化15）年に越中砺波郡城端村（現南砺市）の本願寺派教念寺は同郡神成村（現南砺市）の檀家1戸を送出したが、その宛先は彦兵衛の記録では空白になっている。1818（文政元）年に砺波郡石田村（現南砺市）の本願寺派空泉寺は同村の檀家1戸を本願寺派常福寺に送出している。1818（文政元）年に陸奥行方郡高村（現福島県南相馬市）の真言宗真応寺は同村の檀家1戸を寺籍をそのままにして同郡米々沢村（現南相馬市）に送出している。1819（文政2）年に越中新川郡生地山新村（現富山県黒部市）の大谷派専念寺は同郡生地村（現黒部市）の檀家1戸を本願寺派常福寺に送出している。1820（文政3）年に砺波郡古国府村（現高岡市）の本願寺派勝興寺は同郡市野瀬村（現高岡市）の檀家1戸を送出しているが、その宛先については彦兵衛の記録では空白となっている。1822（文政5）年に砺波郡水島村（現高岡市）の大谷派勝満寺は同郡上渡村（現高岡市）の檀家1戸を大谷派長願寺に、1825（文政8）年に砺波郡柳瀬村（現南砺市）の大谷派万遊寺は同村の檀家1戸を大谷派長願寺に送出している。1826（文政9）年に砺波郡鴨島村（現高岡市）の大谷派西方寺は同村の檀家1戸を送出しているが、その宛先については彦兵衛の記録では空白になっている。1826（文政9）年に砺波郡頼成村（現砺波市）の本願寺派西慶寺は同村の檀家1戸を送出しているが、その宛先は彦兵衛の記録では空白になっている。1829（文政12）年に陸奥信夫郡上飯坂村（現福島県福島市）の真言宗八幡寺は同村の檀家1戸を陸奥行方郡小浜村（現南相馬市）の真言宗無動寺宛てに送出している。そして、1832（天保3）年に越中砺波郡西島村（現南砺市）の大谷派光西寺は同郡晩田相木村（現南砺市）の檀家1戸を送出するが、その宛先は彦兵衛の記録では空白になっている。

このほか、1826（文政9）年に砺波郡山本村（現南砺市）から来着した1戸は彦兵衛の記録では出身地の菩提寺は空白であるが、大谷派長願寺を中村藩での菩提寺としている。また、1828（文政11）年に

来着した1戸は出身地などの一切が彦兵衛の記録では空白であるが、大谷派長願寺を中村藩での菩提寺としている。

このようにして中村藩に来着した移民について、その受入寺院をみておこう。

まず、宇多郡馬場野村（現相馬市）の大谷派東福寺に1815（文化12）年に2戸、1816（文化13）年に12戸、1817（文化14）年は、10月24日までに2戸となっており、このあと同寺が宇多郡中野村（現相馬市）に移って、大谷派長願寺となると、そこに1817（文化14）年12月17日に1戸、1820（文政3）年に2戸、1821（文政4）年に2戸、1822（文政5）年に2戸、1825（文政8）年に1戸、1826（文政9）年に3戸（うち1戸は出身地はわかるも、送出寺院不明）、1827（文政10）年に1戸、1828（文政11）年に2戸（うち1戸は出身地・送出寺院とも不明）、1829（文政12）年に2戸、1831（天保2）年に1戸となっている。東福寺と長願寺はともに発教が開祖であることはすでにみたとおりであるが、東福寺時代に16戸、長願寺になってから17戸、都合33戸を受け入れているわけである。なお、これら33戸のうち、送出寺院を大谷派とする者が23戸、本願寺派とする者が8戸、不明が2戸である。

つぎに、城下中村（現相馬市）の本願寺派光善寺は1817（文化14）年に3戸を受け入れているが、送出寺院を本願寺派とする者が1戸、大谷派とする者が2戸である。

さらに行方郡南新田村（現南相馬市）の本願寺派常福寺は1818（文政元）年に1戸、1819（文政2）年に3戸、1820（文政3）年に1戸、1826（文政9）年に2戸の計7戸を受け入れているが、送出寺院が本願寺派であった者が6戸、大谷派であった者が1戸である。

ここでいえることは、とにかく大谷派と本願寺派との間に、僧侶や信徒の転派といった交錯はみられるにせよ、浄土真宗教団の寺院をつなぐネットワークの強さである。これがあって中村藩では、1813（文化10）年以来、3,000戸にのぼる移民導入を達成することができたのである。

ほかに、行方郡高村（現南相馬市）の真言宗真応寺が1818（文政元）年に1戸（寺籍はそのままにしたの藩内移住）、行方郡小浜村（現南相馬市）の真言宗無動寺が1戸（真言宗のなかでの領外からの移住）を受け入れている。なお、1816（文化13）年に大谷派東福寺に受け入れられた1戸が、のちに本願寺派光善寺に菩提寺を変更しているが、この1戸の送出

寺院は本願寺派であった。

中村藩に来着時の家族構成は「一覧」にみるとおり、5人家族が15戸と最も多く、ついで7人家族が11戸、6人家族と4人家族が9戸であり、2人家族が5戸、3人家族が4戸、10人家族が2戸、8人家族が1戸、9人家族が1戸の順となっている。「一覧」の来着時の家族構成をみても、幼い子供を抱えて旅をした家族も少なくない。さらに中村藩に来着したこれら57戸の戸主についてみると、作兵衛の覚書の注記によれば、出身地の戸主の次男というのが最も多く31戸、三男というのが3戸、弟が3戸、養子が1戸、妹婿が1戸、抱が1戸となっており、これらの大部分は出身地からみれば、分出離村であろうが、17戸ある注記なしというのは挙家離村といえるのではなかろうか。どのルートを通して中村藩にいたったかは彦兵衛の記録からはわからないが、現相馬市中野の大谷派正西寺の先々代の住持八幡義晃の法話などでは金沢藩内の港から船で越後に逃れ、会津を通ってきたということがよくいわれていたのを、私自身は記憶している。この八幡義晃という人は名説教師であったから、私のみならず、多くの人がそのように思いこんでいるところがあるが、いささか話が類型的なところがある。私は中里介山の未完の長大小説『大菩薩峠』に登場する、近世にすでに日本列島に四通八達していた脛に傷持つ人々が通行した脇道が大いに利用された可能性があると考えている。そのさい、北関東に存在する親鸞二十四輩遺蹟寺院巡拝にかこつけての欠落も実際に確認されている（岩本、1988、38頁）。私に関心をもっているのは、介山が件の小説で描いている、信州松本で知り合った越中砺波郡出身の芸者を砺波に送り返してやると約束して、白骨温泉経由で砺波に向かう女連れの旅人の旅程である。介山の小説の面白いのは、その道程を実際に踏破して書いているので非常なりアリティーがあることである。その道程に浄土真宗寺院があれば、移民たちは一宿一飯の恩義にあずかれるわけで、そうしたことから、移民が浄土真宗の教団をあげての事業であったこともすでに説いたところである（同上、11-28頁）。なお、「一覧」によれば、移民の中村藩への来着季節であるが、太陰暦の2月と10月が最も多く、それぞれ11戸、ついで12月の8戸、1月の8戸、3月の6戸、4月の4戸、9月の2戸、閏4月、5月、6月、8月、11月の各1戸の順で、不明が2戸となっている。こうなると、太陰暦の11月から2月にかけての冬期間の移動が28戸と最も多く、うち1戸は中村藩内での移動であるから除くとして

も、1584(天正12)年12月から翌年1月にかけて敢行された当時の富山城主佐々成政のさらさら越えが暴挙といわれるとき、介山の例のルートを利用することはありえなかったことにはなる。その時期の彦兵衛の記録に出てくる移動ルートはわからないが、「一覧」中の越中砺波郡院林村(現南砺市)を1821(文政4)年1月29日に出た10人家族のうち、29歳の長男と21歳の次男は2月29日に中村藩内に着き、8歳の男子と4歳の女子を含む残りの8人は3月2日に着いている。これなど、どこを通過して来たのか興味深い。なお、彦兵衛の記録には、他の3例について所要日数をみることができるが、およそ30日前後であることを挙げておきたい。

8. 中村藩における移民導入政策

(1) 起発立百姓取立

中村藩では1813(文化10)年にまず移民の草分といわれる4戸がさきにみたように林能(発教)によって導入された。そして、同年閏11月7日には家老職を致仕していた久米泰翁の個人事業として50戸余りが導入されている。藩はその久米を、1817(文化14)年9月17日、起発引受御用人上席に改めて登用している(持館泰、1975、1078-9頁)。しかし、これは起発立百姓取立にあたる世話人ということで、藩が1818(文化15)年から始めた「二三男」百姓あるいは「起発建」百姓と名づけ、「開墾費ニ藩庁ヨリ米金ノ補助ヲ給与シ領民ノ子孫ヲ分立シ絶縁再興ヲ其父兄ニ於テ取行ナハシム」(今野、1941=1979、148頁)というものにかかわる世話人で、すでに始まっている他藩からの移民導入は含まれていない。含まれていないというよりも、中村藩としてはそういうことはやっていないことになっているが、ただ、このとき支給される開墾費「一反歩ニ付、一両頃宛」(河村前掲『万控』一)という基準は、その後、移民について1戸あたり10両をめどに支給するという形で引き継がれていくわけで、すでに実際に導入された移民には、公然ではないが、実質、この基準が適用されている。

(2) 金主立百姓取立

ところが中村藩では、1820(文政3)年にさきにみたような形で金沢藩が欠落者の存在を黙認するようになったことを見定め、1823(文政6)年になると、金主立百姓という名称での新百姓取立を策定し、

1824(文政7)年から実施に移すが、それは「領内富民ニ依頼シ若干之補助ヲ給シ、建主ニ於テ初年ヨリ少々ノ年貢ヲ徴シ、半額ハ官納シ半額ハ立主ニテ之レヲ領セシムルノ特典ヲ与ヘ、家作開墾等仕弁セシメ」るものであった。これが従来の「二三男建」や「起発建」と異なるところは、明白に「領民ヲ除キ全ク他領ヨリ移住」した者に限って適用されることであって(今野、1941=1979、148-9頁)、中村藩が公然と他藩からの移民導入を展開することに踏み切ったことが明らかになる。そして、4人の金主を定め、1824(文政7)年2月には、「永代御預地開発御定」が出されるが、「御預地」とは耕作者がいない土地のうち、移民を導入して開発するために金主に預けられた土地であり、金主がその御預地主となるのであり、「御定」の内容は、

向十ヶ年目迄ニ、一人ニテ高三百石以下開発ニテハ難相済、一人ニテ千石迄ハ可被相済候事。

五ヶ年荒地ニ、六ヶ年目ヨリ其村免相之半免ニテ年貢上納可仕事。

但、小作百姓ヨリハ初年ヨリ少シ宛年貢取立候共不苦候。六ヶ年目ヨリハ村免位ニテ取立可申候。

一、年来ノ荒地ニ付新竿入ニテ可相渡事。

一、江下働ハ勿論、夫役高役ハ小作百姓ニテ可相働事。

但、十ヶ年ノ間ハ夫役高役御免。

一、小作百姓ニハ御当地ノモノハ不被相立候。自分物入ニテ他所入百姓立可申事。

一、小屋掛ケ竹木ハ可被下事。

但、松并ニ遠山ノ栗、指紙ニテ自分取可仕候。

但、此ヶ条、追々直ル。跡ニ記ス。

一、家作入用ノ木植立之タメ年貢山望次第御預地主へ可被相渡事。(河村前掲『万控』一)

というものであった。そして、1825(文政8)年5月に出された「覚」で、

一、入百姓共へハ扶持米其外農具小遣等迄早速御手宛可仕事。(同上)

ということが付け加えられ、「一ヶ年廿二軒宛建候積、物入高二百廿両」(同上)とされていることからみて、入百姓1戸あたり10両ずつを、小遣を除いて現物支給することが明らかにされている。

(3) 御頼立百姓取立

このような形で実施されてきた金主立百姓について、1829(文政12)年7月には、「不成就四歩通」、「成就六歩通」というかなり悲観的な見積もりが出されている(河村前掲『万控』一)。彦兵衛の記録でも一

旦取り立てられた者が欠落していることが少なからずみられたが、それには1827、28（文政10、11）年の連年の不作もかかわっているとはいえ、主たる理由として、「一軒高七石平均」という荒地の配分が少なすぎることが指摘されるなかで、「別段御趣意」として、従来の「金主立百姓」に加えて、「御頼立百姓」の取り立てを実施することが藩によって打ち出される（同上）。

この「御頼立百姓」については、「文政十二丑年ヨリ始」められたもので、「郷村ノ吏員其地篤志家ニ依頼シ、新百姓ノ取建ヲナサシメ、功勞ノ厚薄ニヨリ夫々身分格式ノ昇格又ハ知行ノ加増ノ恩典ヲ給フノ仕組」で、「是等ハ金主立ト違へ、小作ノ性質ニアラサルナリ」（今野、1941=1979、148-9頁）ということであった。彦兵衛が新百姓取立世話人に正式に就任したのは、このときのことである。そして、「御頼立百姓」が「金主立百姓」と決定的に異なるのは、「金主立百姓」が金主地主の小作になるのに対し、「御頼立百姓」は荒地明後＝御預、すなわち入植5年後には自作になるということであった。

「別段御趣意」では、「御頼立百姓」について、

在々役人ヲ先立、身證相応ニテ地方巧者之者御選ノ上、新百姓相立指上可申旨被仰付、一軒置料金拾両宛渡切、五年荒地、荒年明後九年貢上納ニ被仰付候。

但、御当地ノモノハ不相立事。

此物入 金五百両 当時御金蔵ヨリ御繰り出シ

此百姓軒別 五拾軒

内 拾軒 不成就二分通

内四拾軒 成就八分通

（河村前掲『万控』一）

という見積もりがなされている。すなわち、在々の役人はじめ身上相応の地方巧者＝富農を選び、新百姓取立の世話を依頼するもので、一軒の取立に藩から10両ずつ補助を行ない、5年間は荒地として無年貢、6年目からは荒地明となつて年貢は全額藩に上納させるというものであり、対象としては、「金主立百姓」と同様、藩内のものは取り立てず、入百姓のみに行なうことになっているが、この場合、入百姓への補助は藩から出されているので、世話人との間に地主小作関係は生じないというものである。そして、1戸あたりの高を8石平均とすることによって、

成就率を8割に引きあげようとしていることがわかる。

むすびにかえて

中村藩では、1833（天保4）年5月に、1824（文政7）年に始まった金主立百姓までの取立実績を218戸・1038人、1829（文政12）年に始まった御頼立百姓の1832（天保3）年までの取立実績を55戸・276人、合計273戸・1314人であることを明らかにしている（河村前掲『万控』一）が、彦兵衛の記録は、1832（天保3）年4月までで終っており、与えられた紙幅がつかたので、本稿もここで擱筆することにしよう。

引用・参考文献

- 池端大二「加賀の走り移民」での数通の葉書『江淳之久爾』第30号、河南地方史研究会、1980年5月。
- 岩本由輝「移住と開発の歴史－“ムラ”の形成と変貌－」網野善彦編『日本歴史民俗文化体系、第6巻・漂泊と定着－定住社会への道－』、小学館、1984年3月。
- 岩本由輝「浄土真宗信徒移民の経路についての一考察」『山形大学紀要・社会科学』第19巻第1号、1988年7月。
- 岩崎敏夫『本邦小祠の研究－民間信仰の民俗学的研究－』岩崎博士学位論文出版後援会、1963年3月（復刻版、名著出版、1976年9月・岩崎敏夫著作集版、名著出版、1984年10月）。
- 岩崎敏夫『相馬の歴史と民俗から』広文堂書店、1998年8月。
- 「角川日本地名大辞典」編纂委員会編『角川日本地名大辞典』第17巻・石川県、角川書店、1981年7月。
- 今野美寿『相馬藩政史』上巻、相馬郷友会、1940年6月（復刻版、東洋書院、1979年12月）。
- 今野美寿『相馬藩政史』下巻、相馬郷友会、1941年9月（復刻版、東洋書院、1979年12月）。
- 杉内清編『先祖十右衛門を偲んで－移住より百六十余年・温故知新－』私家版、1975年10月。
- 相馬市史編纂会編『相馬市史』第4巻・資料編Ⅰ〈奥相志〉相馬市、1969年3月。
- 持館泰「相馬の人物について」『相馬市史』第3巻・民俗・人物編、相馬市、1975年3月。
- 本庄栄治郎「笠間藩の人口政策」『経済史研究』第37号、1932年11月（のち本庄栄治郎『日本人口史』日本評論社、1941年12月、に収録。さらに『本庄栄治郎著作集』第5巻、清文堂、1972年9月に収録）。
- 前田家編輯部編『加賀藩史料』第12編、前田家編輯部、1939年2月（復刻版、清文堂出版、1981年2月）。